

Guardian～守護する者～

弟月 凌

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

舞台は23世紀、地球

人類は最盛期の4分の1に減っていた

原因は宇宙脅威（UT）の侵略攻撃

今生き残っている人類の祖先は地上（うえ）の世界を放棄し一地下（した）へ潜ったらしい

生き残った者に共通していたのはその当時の科学力を結集して作られたの特殊な金属のそばにいたこと

「HOPE（希望）」と呼ばれたそれはUTに唯一効果のあるものであり、人々の想像力を武器にできるものだった

やがてHOPEを使い、UTの侵略を食い止める者たちのことを人々はこう呼ぶ

「守護者（ガーディアン）」と

これはガーディアンを目指す少年少女のはなしである

ニコツとタウン、小説家になろう、pixivにて同時投稿します

目次

仮と真	7
始まり	1

## 始まり

『——では岩ヶ浜の現場にいる上原さんに状況と最新情報を伝えていただきます。上原さん？』

『はい！私は今、事件のあった岩ヶ浜幼稚園の付近にいます。現在、幼稚園では警察とガーディアンによる現場検証が行われています！』

『通報を受けたガーディアンがかけつけた時には生きている人は誰もおらず、変化へんげしていた多数の宇宙脅威者ウの攻撃にあい大怪我をしたガーディアンもいるとの情報が入ってきています』

『上原さん、その岩ヶ浜幼稚園にはHOPPEホー所持者は誰もいなかったのでしょうか？』

『いえ、数人ほどホープ所持者がいましたが、全員幼稚園内での死亡が確認されたということです。』

『上原さん、ありがとうございます。さて、今回起きた岩ヶ浜幼稚園での大量虐殺事件、一体UTの目的は何だったのでしょうか。また新たな情報が入り次第お伝えいたします』

\* \* \* \* \*

『これより、鷹杵たかよ学園の入学式を始める。一同、礼！』

Mをあしらった学校旗の前に立ち、校長の口が開く

『諸君達はかの「岩ヶ浜の悲劇」と同じ年代だ。あの日、無残に散っていった同い年の命を守る存在となるよう、ここで精一杯学び二度とあのような悲劇を起こさぬよう力を磨いてくれ。君たちの活躍を期待している』

こうしてこの物語は始まってゆく

\* \* \* \* \*

23世紀、地球

人類は最盛期の4分の1に減っていた

原因は宇宙脅威者の侵略攻撃

今生き残っている人類の祖先は地上の世界を放棄し地下へ潜ったらしい

生き残った者に共通していたのはその当時の科学力を結集して作られたの特殊な金属のそばにいたこと

「HOPE」と呼ばれたそれは宇宙脅威者に唯一効果のあるものであり、人々の想像力を武器にできるものだった

やがてHOPEを使い、宇宙脅威者の侵略を食い止める者たちのことを人々はこう呼ぶ

「ガーディアン  
守護者」と

\* \* \* \* \*

「改めまして入学おめでとう！今日から君たちはここ鷹杏学園の一員

だ。これから毎日よろしくな!!」

教卓に手を置き、ハツラツと話す若い先生

：あれだけ長い入学式の後だっていうのに先生とても元気ですね！

「では今から呼ぶ人はHOPPEとガーディアン見習いのパスを受け取りに来るように！伊賀信成、伊藤咲、大浦大地、斎藤千佳——」

やがて俺の名前が呼ばれる

たむらかずゆき  
「田村和幸」

「はい」

席を立ち、教卓の前に行く

手渡されたのは金属のリングと顔写真つきのカード

受けとって席につく

「では、HRはこれで終わり！ガーディアン見習いはこの後アリーナに集合だ。それ以外は解散！」

「ありがとうございますー」

この話は第一歩を踏み出した様々な過去を持ったガーディアン見習い達の戦いの話である

\* \* \* \* \*

「はい、みんな揃ったねー。改めて入学おめでとう。今日から君達はこちら鷹杏学園のガーディアン見習いだ」

先ほどとは打って変わって穏やかそうな年輩の男の先生だ

車椅子に乗っているから足が悪いのかもしれない

「とりあえず今日はもう早速HOPPEの使い方を説明しようと思う。何かあった時にすぐ使えるようにね。じゃあ適当に4人ぐらいでグ

ループ組んでみてくれるかい？」

その言葉を合図にゾロゾロと生徒たちはチームを組んでいく

「田村ー今2人？グループ組もうよ」

「おお、いいぞー」

短髪で後ろから見ると男と見間違えうような風貌の齋藤千佳さいとうちかとほんわかした雰囲気の子の2人が和幸のそばに歩いてきた

和幸は近くにいた男子と一緒にいたので4人揃い、その場に座り込む

千佳と和幸は出身校が同じでよく話した仲だ

「お前もガーディアン見習いに進んだんだな」

「まーねー」

そうこうしているうちにグループが決まっていった

車椅子の先生がまた喋り出す

「じゃあ1グループに1人先輩がつくから今の時間何かあったらその先輩に聞いてねー」

そこまで言って後ろを振り返り

「んじゃーテキストにグループについてってー」

待機していた先輩に言った

先輩がわらわらとグループにつきながら先生がのんびりと言った

「じゃあ早速起動させてみようかー」

「とりあえず起動させて形を作ってごらんー。今空気中のHOPEガスの濃度を上げてるから形は作りやすいと思うよ」

「えっHOPEって金属じゃないの」

「HOPEを使用するには空気中のとあるガスが必要なんだよ。それを総称してHOPEガスと呼んでるんだよ」

驚いた和幸にグループについて短髪のいかにもスポーツ系の先輩

が説明してくれた

「へーそうなんですか…」

「まあ、とりあえず起動してみようか！起動したらH O P Eの方から自分に合わせた武器を形作ってくれるよ、こんな感じで」

そう言うとき先輩は右手首にあるH O P Eを触って起動させた

一瞬リングが霧散し、次の瞬間先輩の手には大剣が握られていた

「かつけえ…！」

テンションが上がるボーイズ

「すご…！」

感嘆するガールズ

「はい、見てないでやるやる…！」

先輩に促されて和幸も右手首につけたH O P Eに左手を触れる

「起動！」

一瞬のラグの後H O P Eは和幸の手を離れ、一対の武器に変形した

「できた！」

出てきたそれは鎌の持ち手を極端に短くしたような形をしていた

刃先を外側に向けて持つとそれは――

「カマキリじゃないの、それ」

千佳が面白そうに言うがまさにその通りだった

「うるせーそういうお前はどうかんだよ！」

そういういつつ千佳の手元を見ると銀色のスライムみたいなのが空

中でうねうね動いていた

「…」

「……」

泣きそうな顔で千佳がチラツと周りを見渡すと皆形は違えど武器らしきものを形作っている

「…珍しいな、このガス濃度で形が出来ないっていうのも」

先輩も困った顔をしている

「まあ今回上手く起動できなくても今から慣れていったらいいからねー」

むこうから車椅子の先生がフォローを飛ばすが形が出来てないの



は千佳一人だけ

フオローになんないぞ、先生

和幸が思っているのと千佳がじつと和幸の武器を凝視していた

と、銀色スライムがシュン！と変形して一対の武器に変わった

でもそれは…

「俺のじゃね？」

そう和幸の武器と瓜二つ

千佳は困った顔をしたまま自分の武器に手を触れる

するとまたグニヤリと形が変わり、大剣の形に

「あれ、俺の大剣？」

先輩が素っ頓狂な声をあげる

「どうも人のコピーとか想像したものができるみたいです…」

ぐにぐにと手に持つHOPEの形を日本刀に変えながらおずおず

と千佳が言った

「それはそれで凄いな、うらやまー」

隣で小型ナイフを作った男子が言う

「でもそれ裏を返せば最適な武器がないってことだよね…？」

とあからさまにがっかりした顔で千佳が答えた

「とりあえず今日はこれでおわりにするよら。ちなみに君達にも隣のミニアリーナの使用許可が出るから今日の放課後から特訓をしてもいいんだよくじや、自由解散にするから先輩に何か聞きたいことがある人は今のうちに聞いておこうねー」

と車椅子の先生は言いたいことだけ言い切ってアリーナから出て行った

…そーういやあの先生何したんだ？

\* \* \* \* \*

## 仮と真

「最近の科学は部屋の大きさもプログラム<sup>設定</sup>で変えられるんだもん…科学の進歩ってすげえよなー…」

サブアリーナの受付で待ちながら和幸はしみじみとつぶやいた

「まあ今の人類が地下<sup>した</sup>に潜った辺りから飛躍的に科学が進歩したって歴史にも書かれてるからねー。てか和幸今日はいつまでここにいろの?」

同じく待たされながら千佳が話をふった

「ん?俺のところ母上しか家にいないから別に何時までいてもいいけど?」

「母上って…いつの時代の人よ……」

「え?俺ん家いつも『母上、おなかすいたー』『はいはいー』って日常茶飯事だけど?」

「母上口調軽いなオイ」

そんな無駄口を叩きながら練習場がセッティングされるのを待つ  
「そーいうやーあれから上手く形作れるようになったのか?日本刀?」

和幸が話題を振ると千佳の表情が一気に曇る

「入学式の時よりかはマシになったけど…気を抜くと液体に戻るんだよねー…」

あれからHOPPEの起動授業は入学式後、今日までに3回あったわけだが、千佳は相変わらず無理やり日本刀に形を整えて授業を受けていた

それはそれで凄いことではあるが、集中力が切れるなど何かの拍子にぐにやっとなを変えてしまうのだという

授業を受け持つあの車椅子の先生ですら

「今までに例を見ないケースですねーまあゆっくり自分にあう形を見つけてくださいいねー」

と言っ解決策が出ていない

かなり稀なケースなのだろう

「まあ…とりあえず練習場できたみたいだしやろーぜ?練習をさ」

そう千佳に言つて一足先に和幸が生成プログラムされた練習場に入る  
「まあこの練習で変な特技できたのは認めるけどね…」遅れて千佳が  
続く

千佳が練習場に入ったことを確認して和幸が壁に埋め込まれた  
タッチパネルを素早く操作する

入り口がすうーっと消えていき、密室になった

「んじやー行くぜ?」

和幸は素早くHOPPEを起動し、両手にソードトンファーを持って  
ボクサーのような構えをとった

「…おっけー」

例のごとく無理やり形作つた日本刀を両手で持ち、目の前で構える

千佳

それを聞いた和幸は素早く地面を蹴る

「うりゃあー!」

千佳に突進して行つた

そのまま左の拳を突き出すようにして千佳に斬りかかる

ガキーン!

千佳が上手く左のトンファーを弾いて後ろに下がる

もちろん当たつても怪我のないようにガーディアン見習いのHO  
PEには制限がかけられてはいるがそれでもそこその威力はある

男の和幸の一発をその程度に抑えた千佳もなかなかではある

「おりゃー!戻りが遅せーぞー!」

もちろん一発で止まるような和幸ではない

再び間合いを詰め、上下左右から攻撃を仕掛けていく

それを後ろに下がりつつも1つ1つさばいていく千佳

ぐにや

「!」

と、和幸の左の攻撃を受け止めた瞬間千佳の日本刀が曲がつた

「もらつたー!」

左手を引き、そのままの勢いで回転し裏拳の要領で和幸が右側から  
襲いかかる

しかし

ガキン！

「…甘いよ？」いつの間にか千佳の左手には日本刀ではなく  
トンファーが握られ、和幸の攻撃を防いでいた

「はっ！」

「やべっ！」

危険と僅かな風圧感じて下がる和幸

今さっき和幸がいた場所を千佳の右手にもつダガーがすり抜けて  
いった

「…いつ見ても何が出てくるのか分かんねえよな、それ」

口調は飄々としてるが内心ヒヤヒヤしながら和幸は言った

「こっちだってパツと思いついたの出してるんだから何が出るかなん  
てその時次第だよ？」

肩で息をしながら千佳はトンファーとダガーを再び日本刀の形に  
戻した

千佳の変な特技

それは今までに見たことや聞いたことのある武器を瞬時に呼び出  
すことだ

日本刀の形を維持できなくなるとどうしても丸腰になってしまう  
がそれは実戦ではかなり危険な状態になる

その応急処置で何でもいから武器を出すというのがこの特技  
の始まりだった

ただそれがあまりにも素早くできる上、出せる武器も多種多様、さ  
らには千佳がその全てをそこそこ使いこなせるためもうこれで戦え  
ば良くね？と和幸が思っているのも事実である

ただ千佳本人は納得しておらず、

「自分に合う武器が欲しい！」

と言っているがやはりH O P Eを起動すると最初は銀色スライムが出るのが実際のところである

「今度はこっちから行くよー！」

千佳は日本刀の切っ先を和幸に向けると走り出す

「おう、来いー！」

それを迎え撃つため和幸も走り出した

\* \* \* \* \*

15分後

千佳と和幸は床に座り込んでいた

「はあっ…はあっ…なにが特技使いたくねえだ。日本刀から薙刀に変化して、距離を取ったら銃に変わるとか最早反則レベルだろ」床に寝っ転がりながら和幸が恨めしそうに千佳を見た

「はーっ、はーっ、はーっ…それを…全部…防いだのは…誰だよ…」

今にも過呼吸になるんじゃないかというほど息を切らした千佳は壁に寄りかかって和幸を見やった

ビーツ！ビーツ！ビーツ！

そこに響く警報音

「…何？」「何だ？」

お互いそのままあたりを注意深く見回す

と、次の瞬間天井に穴が空き上から白く濁った物体が落ちてきた

「うわあ?!」

慌てて横に転がり回避する和幸

間一髪避けたがその物体はちょうど和幸と千佳の間に落ちてきた

「こいつはー」落ちてきた物体を見て千佳が飛び起きて戦闘態勢をとる

和幸も起き上がりながら確認する

白く濁ったスライム状の体

赤い目

両脇から生えている鋭く尖った触手

大きさは小さくてずんぐりしているが間違いない

「なんで宇宙脅威者がここに?!」

宇宙脅威者

それは人類の敵であり

ガーディアンとの戦うべき敵だった

「つて、驚いてる場合じゃないよ!和幸非常ボタン!!」

「お、おう!」

向かい側にいる千佳が素早く銃を呼び出し牽制攻撃を開始する

攻撃を受け宇宙脅威者が千佳に気を取られた隙に和幸が壁のタツ

チパネルに飛びつく

いくら今日の前にいる宇宙脅威者が小さめとはいえ、自分達候補生

では無理だ

だからとりあえず外にこつちの状況を伝えなければならぬ

だが――

「ダメだ、ウンともスンとも言わねえ!」

「うっそお!」

タツチパネルをいくら叩いても反応しない

そうこうしているうちに宇宙脅威者は千佳にゆっくり歩み寄って

いく

「とりあえず分かったことは――」

タツチパネルの操作を諦めた和幸は両手にソードトンファーを呼

び出ししつ宇宙脅威者に向かっておもいつきり跳躍する

「宇宙脅威者を倒さなきゃ生きてここから出られねえ!」

腰を捻り先ほどの練習の時の要領で宇宙脅威者の背中に斬りかか

る

「なっ?!」

だが手に斬った感触が伝わってこない

せいぜい宇宙脅威者の体をへこませたことぐらい

へこんだという事は――

「危ない！」

『ウオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!』

「ガッ?!」

案の定宇宙脅威者のへこんだ部分が戻り、トランポリンの要領で思いつき突き飛ばされた

思いつき壁に叩きつけられ、息が詰まる

あまりの痛みに壁に背中をつけたまま動けない

「なんで…」

切れない、と思って和幸は自分の手元を見やって原因に気づく

「ただのトンファーに戻ってる…!」

「つてか部屋のガス濃度下がってるんじゃない?!」

千佳も事態に気づいたらしく銃で宇宙脅威者をの目くらましをしながら和幸の方に走ってくる

この部屋のガス濃度はアリーナで一括管理されてる

たぶんタッチパネルが壊れたということはその管理システムごと壊れたんだろう

その証拠に千佳の銃も連射速度が落ちているようだ

「ジリ貧じゃねえかよ！」

じりじりと近づいてくるUTに悪態を吐きながら和幸はHOPEを変形させて自分と千佳の周りにシールドを張る

あつても大して効果はないが全くないよりかマシだ

だが宇宙脅威者は左の腕を伸ばすと、鞭のように振るい、シールドもろとも千佳と和幸を吹き飛ばした

ドンッ

「カハッ…!」

まともに受け身を取れずに床に叩きつけられ、息が漏れる

肺が潰れるんじゃないかと思うほどの痛みだ

身体の全身が痛みで動かない

HOPEは集中力が切れたせいでブレスレット状戻ってしまった  
かろうじて和幸が頭を上げて見渡すと壁際に千佳がうつ伏せに倒

れているのが見えた

もしかしたら気絶しているのかもしれない

と、思っていると思っていると首周りに何が巻きつき、和幸はグイ、と空中に持ち上げられる

宇宙脅威者が触手を巻きつけて持ち上げた和幸を凝視している

このままだと首の骨を折られるか喰われるかのどちらかだろう

正直、身体はほとんど動かない

それでも、と和幸の頭はフル回転を始める

外先生たちの人に連絡しなければここで死ぬ

だけど現段階では連絡手段はない

おまけにH O P Eを使いたくてもガス濃度が低下した今の状況だ  
複雑な武器を使うのは不可能という完全死亡フラグ

なにより俺の後ろには千佳がいる

なんとか意識が戻るまで時間を稼ぎたい

なら、やることは1つだ

和幸は覚悟を決める

宇宙脅威者の口が徐々に開いていく

———  
今だ！

「起動!!」

一縷H O P Eの望みにかける！

自身の目の前に棒を2本出現させる

いけえ！

『ウオオオオオオオオオオオ?!』

和幸の意思を体現するように棒は宇宙脅威者に向かい———正  
確に赤く光っていた宇宙脅威者の目に突き刺さった

和幸の首から触手が離れ、なんとか地面に着地する

「このまま……」

時間稼ぎを、と言いかけた和幸の手元からアラーム音

『H O P Eガス濃度低下、形を維持できないため強制シャットダウン  
を行います』

「…へ？」



瞬間、突き刺さってた棒が粒子化し和幸の手元に戻る  
そして再びブレスレットの形に戻るとウンともスンとも言わな  
な

「おい？おいおいおい！今動かなくなるのかよ！ピンチなんですけど  
?!」

ブレスレットを手で掴みながらガンガン振ってみるが勿論反応ナ  
シ

顔を上げると

『グルルルルルルル……』

今にも噛みつかんばかりの怒り顔

「…やっぱブチ切れてますよねー……」

為す術 なし

逃げる術 なし

もう無理だ

ペタンと和幸は座り込む

宇宙脅威者<sup>U</sup>が触手をゆっくり後ろに引く

人間でいう右ストレートの要領で串刺しにでもするんだろう  
和幸の頭の中でこれまでの記憶がぐるぐると渦巻きだす

——ああ、これが走馬灯っていうのかなあ

後ろに引かれた触手が和幸に真っ直ぐ向かってくる  
和幸は目を閉じた

\* \* \* \* \*

「…勝手に死亡フラグたててもらっても困るんですがねえ」

呆れた女の声で和幸が目を開ける

「!？」

和幸の目に映ったのはついさつき和幸を串刺しにしようと突き出された触手

と、それを遮る銀色の壁

何かに気づき後ろに下がろうとした宇宙脅威者を

ガガガガガッ

「させるかバカヤロウ」

無数の槍ランスが降り注ぎ触手を地面に縫いつける

「覚悟はできてんだよな？」

今まで後ろにいた声の主が和幸の横に並ぶ

「千佳…？」

和幸は見上げながらそいつの名前を呼んだ

「…千佳？」

「下がって」

再び声をかけた和幸は千佳の表情からただならぬものを感じ、急いで壁際まで後退した

和幸が完全に下がると千佳は自然な動作で左手を軽く横に振るつた

その瞬間宇宙脅威者の左側の虚空から剣が出現、次々に突き刺さつた

ザシユツ

『ガウっ?!』

「で、宇宙脅威者さん、さつき散々痛めつけてもらったからお返しさせてもらわないとね」

そう言って一歩踏み出す千佳の表情は見えない

でも後ろの和幸からでも分かるほどの殺気を放っていた

相手ももそんな殺気を感じているのだろう、槍に縫いつけられてた触手を切り落として後ろに飛びのいた

「覚悟しなよ」

それと同時にさっきまで突き刺さってた槍が細かい粒子となって千佳の周りに集まり、白い粒子となって千佳の周辺で渦を巻く

その状況に和幸は心なしか、部屋の温度が下がったように感じた『グルヴァー！』

今まで距離を取っていた宇宙脅威者が叫び声と共に突進してきたそのまま千佳にむかつて真っ直ぐ飛んでくる

そんな接近戦を仕掛けてきた宇宙脅威者を

「うるさい、消えろ」

千佳はバツと右手を前に突き出す

その動きと共に千佳の周辺で渦巻いていた白い粒子が一気に宇宙脅威者に向かって行き

ドドドドドドツッ！

数多くの武器となってUTに降り注いだ

今度は、宇宙脅威者の叫び声はなかった

ドサツという音とともにUTが倒れ

宇宙脅威者の周辺にラグが出て活動を停止した

「…はっ。」

その状況に和幸はぽかんと千佳とUTを交互に見比べる

通常破壊された宇宙脅威者はその場から消滅する

消滅しないってことはつまり…

『いやー、さっすがだねー！あの規模とはいえ2人でUTを倒しちゃうなんてー!!』

…唐突にスピーカーから明るい男の声が響く

「…先生?！」

『そうですねー、先生ですねー。いやー斎藤さんのオリジナル武器がずっと出ないって話だったからね、ぽんつと実戦状況下においてみたらどうかかなーつと思つてやったんだけど結果オーライだねー』

和幸も千佳も言葉を失っている

それをいいことにペラペラ喋り続ける先生

『うん、斎藤さんの能力の初期段階は粒子だね。そこから状況に合わせて自分で合う武器を作り出す能力だから近中遠距離どこでも対応できるから使い勝手がいいよー。たぶんいつもの練習はH O P Eガス濃度が高いのが裏目に出ちゃって塊としてでてきたんだろうねー。』

「あの先生」

『なんだい?』

ずっと無言だった千佳がチラリと今だにラグを伴って存在している物体を見やり、スピーカーに向かつてたずねる

「じゃあこの宇宙脅威者は?」

『それは訓練用のプログラムだね、まあそこそこ強かったっしょ?ちなみに部屋の外に連絡取れなくしたのはその方が緊張感増すかと思つてねー』

「……………先生、いっぺん死んで見ます?」

その瞬間千佳の周辺に先ほどの比ではない量の白い粒子がブワツと発生

『ちよつ、ちよつと落ち着いて!』

それをなだめた和幸の必死の努力は語られることはない

\* \* \* \* \*